

中齋塾 東京フォーラム
平成 24 年 第 7 回講話

平成 24 年 9 月 8 日
於 湯島聖堂

おはようございます。8 月夏休みを取られた方おります？

おられない。何となく話しぶらいかな。

ー1 週間取りました。

1 週間は有意義に過ごせましたか？

ーそんなことも無かったです。しかし料理が上手になりました。主にフライパン料理ですが…

それは結構ですね。

<8 月中は、河井継之助と渋沢栄一に取組む>

私は数年前から 8 月の一ヶ月間は、夏休みを戴いています。今回の休みの間は、河井継之助と渋沢栄一をセットにして 2 冊書こうと思い、8 月はまるまる執筆活動にあて、他の仕事をセーブしたつもりでしたが、中身は忙しくしてしまいました。

『陽明学のすすめⅢ』を見ていたら、平成 22 年度が最後の出版でしたので、これはいかんなどと思い、平成 24 年度に 1 冊、平成 25 年度に 1 冊を出す予定で出版社と打ち合わせをしたところ、9 月末までに完成原稿を戴けたらギリギリ 3 ヶ月で本にしまして、年内に出版できるという話でした。

来年の 1 月に中齋塾が一般財団法人化に伴い記念のパーティをささやかながら予定していきまして、河井継之助の漢詩をお願い致しました石川忠久先生にもお話しました。お出でになる皆様のお土産に本を 2 冊お渡したいと思って今、一生懸命邁進しています。

私は、現在市場に出回っている関係の書籍類、または地元にある郷土史、文献等をかなり漁って読みこなし、テープにするという形をとっています。ちなみに写真も撮ります。来週は渋沢栄一関係で 3 ヶ所写真を撮りに行きます。渋沢栄一が住んだ家屋敷が青森の小牧温泉に移築されていまして、この家屋敷は木内信胤先生が新婚時代に住んでおられました。飛鳥山には渋沢資料館があり、生家は深谷にあるので、そこも行ってきました。

本や資料を読みこんで、関係者に話を聞き資料集めに歩いてと云う事を 8 月中していきまして、9 月もやっております。久し振りに大車輪に動き回って、頭の中に詰め込んで回転させたら今年初めての持病がでました。それからぎっくり腰になりかけて、危ないと思ったので今日は杖をついてきました。

河井継之助を調べていますので少々申し上げますと、当時の資料で、「東の河井継之助、西の西郷隆盛。東の河井継之助、西の中岡慎太郎」というものがありました。

明治の三傑で、西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通といわれていますが、色々調べていくと、その三傑よりは人物が上だと感じます。実績も師匠の山田方谷を上回る実績をあげていたのには、ちょっと驚きました。

河井継之助の視点を通して、現代の日本を見、これからの日本はどうあるべきかを考えていく上で、河井継之助の視点は役に立つと強く思いましたので、今日は時事評論と絡めながらお話致したいと思います。

河井継之助に関わる人々

色々な資料を読みこんでいく中で、河井継之助の血筋がないのが気になるので調べてゆきましたら、実子はいなかったけれど妾腹の子がいました。その子は上州桐生の文昌寺に河井継之助の子供の墓という表現で資料に載っていたという資料が見つかりました。その資料は約 30 年前の長岡郷土史第 19 号です。新潟県警の方が書いたという論文が載っていました。それはネットで見ても手に入らない。記念館に問い合わせましたら、ネットに出ると瞬間的に売れてかなり高値で取引されているので、なかなか手に入りませんという話でした。そこで出掛けて行きまして、資料を戴きましたら確かに書いてありました。

私は 2~3 日前に文昌寺に出掛けて「河井継之助の遺児の墓」というのが残っている事を確認して来ました。その遺族の御子孫にあたられる 86 歳の人にお話を聞きましたら、「証拠は何も無い。本人がお墓にそう書き残しているだけなので、色々腑に落ちることは沢山あるのですが、河井継之助の血筋であるという証拠立てるものは何も無いのが残念ですが、（血筋で）あってくれれば良いなと思っています」という話を聞かせて貰いました。帰る時には、玄関まで送って頂いて「また来て下さい」と話しておられたので、本になりましたら「またお伺いします」と約束をして辞去しました。

脱線をしますと、陽明学では自分が納得いくまで足で歩いて確認をしなければならない。自分の足で歩いて確認をするというのは身体の血肉になるから良い事だと思います。

たまたま忠久先生と河井継之助の話をしましたら、忠久先生は「凄かったね」と言われ、「どこが凄かったと思いますか」と聞きましたら、「あの人は、九州まで足でずっと歩いたよ。新潟の山奥から雪の中を江戸まで歩いて来て、江戸で修業をして、そこから横浜まで出掛けて行って、横浜の居留地で青い眼をした外人の家に泊まりこんで情報収集すると同時に、火の用心とか言って用心棒がいな事もした。それから方谷先生に会いたいという事で延々と岡山まで歩いていった。四国を歩きながら、岡山に行き、九州に行って長崎を見て歩いて色々な人と意見を交わして帰ってきた。帰りは山陰路を通ってきた。あれだけのコースをよく歩き通したものだ」と言っておられました。

塵壺という継之助の旅日記が残っており、歩いた感想等が書かれています。日記では山田方谷のことを、山田とか、安五郎とか呼び捨てにしていますが、段々岡山に近づくにつれ語調が変わりました。岡山のすぐ隣まで来たところ、飯盛女の人が継之助から「私は方谷先生の側に生れなかったのは残念だ、近くで生まれていたら人生は変わっていた」と聞いています。山田方谷は河井継之助にとって神様のような存在になりました。

山田方谷に色々教わり、継之助が国許に帰る時、先生が対岸で見送りをしていると分かった時には、師の方谷に対し地面に正座をして礼を何度もし、帰路につきました。奥様が言い残したもので、「私の主人は方谷先生が書いた書を毎日掛けて礼拝を欠かさない。方谷先生を神のように崇めていました」というものがありました。

戦場で左膝に銃弾を受け死ぬ寸前、側にいた人に方谷先生に伝えて貰いたいと言い、「不肖河井継之助は方谷先生の教えをお別れして以来、毎日必ず守り通して、死ぬ今日まで守り通した」という事を先生にお伝えして戴きたいという事を残して亡くなっています。だから結びつきは凄いです。結びつきを強固にしたものは何かと言えば、陽明学です。陽明学という学問を通じて、方谷、継之助は結びつく。これはあくまでも行動を重視した学問ですから、行動をしなければ話にならないという事で継之助は色々な行動をおこしている。業績については、また後でお話します。

鈴木虎太郎が、継之助の股にある腫れものの為に継之助がガニ股で歩き、まともに座れなく苦しんでいるのを見て、「お医者さんに行って治したらどうですか」と聞くと、継之助は「いやいや、これは良い機会なんだ」と言い、虎太郎は「何がですか」と問いましたら、「学問の力を自分で試す機会なのだ、何故ならば、私が習っている学問は苦しいものを苦しいとは言わない。辛い事を辛いと言うな、痛い時に痛いと言うな、軽く流せ。心頭滅却すれば火もまた涼しという事で、これは実験をしている」と、腫れものが出来て痛くてどうしようもないと云う苦しみを素知らぬ顔で、痛いと言わない実験をしているから余計な事を言うな。それが出来るかどうかは、この学問が本物かどうか、また自分の身にこの学問が身についたかどうかを調べていると鈴木虎太郎に言ったそうです。

二つの記念館

ちなみに河井継之助の記念館は2つあります。新潟県長岡市に河井継之助（つぎのすけ）記念館と、本人が亡くなった場所が福島県只見で、その場所にも記念館があります。ここは継之助（つぐのすけ）記念館。何故、同じ人なのに読み方が違うのかと思っていたら、司馬遼太郎の「峠」という作品が関わっていました。現地に行くと色々分かりまして、峠には司馬遼太郎がだいぶ調べたとあったのですが、実際は3日しか取材しなかったと云います。小千谷には半日いて、ここの住職の奥様に話を聞いて、書きたいと思って書いたそうです。司馬遼太郎が長岡小学校100周年記念の時に講演をしたので、その講演記録を読んだら色々な事が書いてありました。司馬遼太郎という人は地元はかなりリップサービス

をする人なのだなと感じました。安藤英男さんも河井継之助を調べて書いています。

私も色々読んでいたら、北越新聞という地元紙が「つぐのすけ」というルビを振ったのが始まりで、そこから広がったという経緯がありました。

安藤英男さんが司馬遼太郎に、「貴方は、つぎのすけと言っているが、あれは、つぐのすけが正しい」と論争を仕掛けたという経緯があります。安藤英男さんが福島県の記念館をつくる中心人物になりましたので、「継之助（つぐのすけ）記念館」となりました。

人間の思いが色々錯綜すると後世の人間は分からず、闇の中に入って行く。話がポーンと飛ぶと、会社、自治体、国家、政府も、創業の頃が分からなくなっていくと闇に入ってしまうし、自治体や組織、その国は滅びると思います。創業の頃、最初の頃の話は、よく調べて自分の血肉にしないといけないなと感じました。

8月中は河井継之助と渋沢栄一に取り組んでいましたので、前置きが長くなりましたが、頭の中は河井継之助ばかりですので、お話をさせて戴きました。

<恒例の質問>

- ・8月中は嘘をつかなかった。リップサービスも許容範囲です。
- ・八月は良い月だった方？
- ・八月は有難うを良く言った方、また言われた方？

手の挙がらない人は、それほど大きいことではなく、何か、美味しかった食べ物のこととか、よく歩けたなどか…。歩ける、歩き続けるというのが出来るのは、大したものです。斯文会に関係しておられた故宇野先生は90歳代に入られた頃でしょうか、歩く時に杖をつきながら、ゆっくりのペースで外に出掛けていました。お歳に関係なく歩けるというのは素晴らしいです。この間、私は湯島聖堂の女性職員さんと「じゃんけん」をしました。震災で色々壊れてしまったので、寄付をしてくれないと直せないので修繕費が欲しいのをお願いしたいとあったので、私は、「私とじゃんけんをして、私が負けたら出しましょう」と言ったら、女性職員さんは迷いに迷ってじゃんけんをしたら…私が負けてしまいました。でも、これで良かったなと思いました。

- ・健康法を実践していた方、眠り方が変わった方？

ーはい。私、昔は夜中に起きていたのが、アロマをたいてからは、ぐっすり眠れるようになりました。

論語 『先進第十一』

【一】子曰く、先進しいわの礼楽せんしんに於ける野人れいがくなり。後進おの礼楽やじんに於けるや君子こうしんなり。如し之れいがくをおくくんしなり。如し之もをこれ

もち すなわ われ せんしん したが
用いば、則ち吾は先進に従わん。

これは孔子が昔を懐かしがっている科白です。野人というのは、野蛮人という意味ですが、勉強をあまりしない人達という風に捉えれば良いでしょう。先進というのは、最初の頃のお弟子さん達。最初の頃のお弟子さん達だから、孔子から教わったものを、自分の血肉にして政治の世界に入り、孔子から教わったものを実際に活かしたいという要求が強い。政治に使える実務的な知識は仕入れるが、しかし文化的な教養が少ないから野人であるという言い方をしました。後から孔子の所に入門してきた貴族の二男三男のお弟子さんは、文化的な教養はかなり進んでいる。

孔子から見て、自分が若かりし頃一緒にまつりごとについて討議をした受講者・仲間・同志的な人達と、教育にいけると決めて教育に力を注いだ弟子達、どちらと付き合うかといえ、昔の弟子達が懐かしい。

【二】子曰く、我に陳 祭に従いし者は、皆門に及ばざるなり。徳行には顔淵・閔子・
騫・冉伯牛・仲弓。言語には宰我・子貢。政事には冉有・季路。文学には子游・子夏。

これも昔を懐かしんでいる話で、孔子が陽虎に間違われて、孔子とその弟子達は地元の人達に取り囲まれ攻撃をされて飢死にしそうになり、逃げられないという状況がありました。

陳、祭の国境近くで、孔子は、私についてきたばかりに自分の力を発揮する、政（まつりごと）に参画する機会をみな逃して気の毒な事をしてしまった。昔の弟子達を思い出していると、徳行に優れているのは、顔淵、閔氏騫、冉伯牛、仲弓。言論、言葉というものに能力を発揮したものは宰我と子貢がいる。言語には宰我、財政には子貢と言った方が私は良いような気がするのですけれど、でも孔子がそう言ったのだから、そういう事なのでしょう。

政事は、まつりごとです。まつりごとには冉有、季路であるし、文学の面においては、子游、子夏。

自分の教えたお弟子さん達がどんどん能力が上がり、活躍の場が広がってゆくのは、先生の立場としては楽しかったでしょう。面白いのは弟子の数で、三島中州も、その師匠の山田方谷も、またその上の師匠佐藤一斎も弟子三千人と残っています。言い方は「たくさん」という事で繋がっています。王陽明も孔子も弟子三千人です。直接教えた弟子からどんどん広がっていくのも含めると、そのような言い方になります。このように弟子が次々に来るのは嬉しい事です。

【三】子曰く、回や我を助くる者に非ざるなり。吾が言に於て悦ばざる所無し。

昔、ある会で木内信胤先生を二十数人で囲み、司会者が「先生に質問のある方？」と言うと私はすぐ手を挙げ、必ず先生に話をして戴こうと思って質問をしていました。木内信胤先生は以前「僕は佐倉宗五郎の生まれ変わりだからね」というのが耳に残っていました。

て、生まれ変わりというのは、輪廻転生を信じているという科白にもなりますし、それから来世があるのを信じているという事になるから、そこら辺の事を先生に話して貰おうと思って、「先生に死ぬ覚悟はおありですか、どういう覚悟をお持ちですか」等とお聞きしながら、先生しか答えられない話をぶつけていくと、「君は何だか知らないけど、僕に余分な事をたくさん喋らせようとしているね。そんな色々な事を喋らせるような質問は、君はすなわち」と仰った事を思い出して、ここを読みました。

孔子曰く、顔回というものは、私に対して助けてくれている訳では無い。色々なお弟子さん達は孔子に対して質問をしたり、手伝ってくれるけども、顔回は私に対してちっとも協力をしていない。私の話を喜んで聞き、何でもかんでも喋らせようとする。目を輝かせて聞いているから、私も調子にのってつい喋ってしまう。顔回を目の前に置いて話をするのは、疲れてしまうからあまり嬉しくはない。

喋るというのは、眉毛が薄くなるという話があります。要するに心臓を傷めて眉毛が薄くなる。喋れば、喋るほどエネルギーを使い疲れてしまいます。

この頃の孔子は、歳ですから一時間も話をすればぐったりしてしまうでしょう。きっと顔回と話をした後、ぐったりして寝てしまうのではないかという気がします。この文章からそのような姿が見えて来ます。

この章は、孔子が昔を懐かしんだり、愚痴をこぼしたり、氣楽に話をしたりと穏やかな良い雰囲気です。今回ゆったりと素読をして戴いた会員さんの素読が、今日の章にピッタリと雰囲気があっていたと感じ良かったです。

今回のテーマ

『これからの日本、河井継之助の視点』

河井継之助の経歴をお話致します。河井継之助は、山田方谷が上げた実績を上回ったところが凄く、大器晩成型でした。数えて42歳の生涯でした。小さい頃は親の言う事、先生の言う事を聞かない子供でした。例えば親が、馬術の先生をつけたら、馬にパッと飛び乗って走って行ってしまった。そうしたら先生が「作法を教えるから覚えなさい」と言ったところ、「馬というのは乗れば良いのでしょうか、先生に教わる事はない」と言い、先生は怒ってしまったという話がありました。

本を読むのに多読と精読があります。多読という読み方は、たくさん本を読む方が良いという読み方で、いわゆる朱子学的な読み方です。

継之助は精読でした。氣にいった本は何度も読み返しをする。読む時には、そっくり写す（書写）事をしていました。その様子を見ていた仲間は、「継之助の書写は、字を彫って

いるようである。力を込めて彫っている様な形で写している」という様なエピソードが残っています。

継之助は独特な勉強の仕方をしていました。自分が氣にいった先生には教わるけれども、氣に入らない先生には教わらないということを明確に打ち出していました。そういう性格を親が見て、これは困ったものだと思い、結婚すれば大人しくなるかもしれないと考え、継之助 24 歳の時に 16 歳の嫁を迎えました。親からすれば、家庭を持てば少しは大人しくなっていて、学問と家の仕事を両立するだろうと思ったけれども全然ダメでした。学びたいという意欲が強くあり、嫁を貰っても何のそのでした。結局、継之助は念願かなって江戸へ出て、自分が良いと思って入塾しては駄目だと思い、すぐ違う学問所に入ることをして、やっと氣に行った所に入りました。佐久間象山の所にも行きましたが、継之助は「佐久間象山は実に偉い人物だけれども、態度が横柄なので弟子になるのはやめた」という事でやめて帰ってしまいました。

継之助は陽明学の勉強をしたかったのだが、なかなか陽明学の特に実践の仕方、長岡藩改革の具体的な方法を教えてくれる先生がいなく、探し回った結果、備中松山藩の山田方谷に行きつきました。そして弟子入りをしますが、その時に面白い問答がありました。「方谷先生は佐久間象山という人物をどう思いますか」と質問をしたら、「温、良、恭、謙、讓、いずれも一字、象山にありや」というのが答えでした。おだやかで人様に譲るといふ事など佐久間象山に謙讓の美学が一つでもあるか。あんな横柄で傲岸な人は、この世の中にいないというのが山田方谷の答えで、継之助も「私も実はそう思っています」と、山田方谷に弟子入りをしました。

河井継之助は態度が大きかったので、藩の家老は、河井継之助は余計な事ばかり言うので、重要な役職につけないようにし登用をしませんでした。しかし世の中の情勢の変化は目まぐるしく変わっていくので、主君が河井継之助は変わっていて役に立つと思うからと役職につけさせました。役職についたらグンと伸び始めて、実権把握以降 3 年ちょっとの間でおこなった業績は、山田方谷より遥かに上回るものでした。

<行財政改革－給料の改革というより革命>

家禄改正

河井継之助がおこなった事で凄い業績は、給料の改革です。

今の民主党は自分達の報酬を減らすのに手間どっています。官僚の給料もしかり。だいたい 1 割 2 割減らすのに、あの体たらくは何事かと思えます。

河井継之助は、政権をとってから僅か 3 年位の間に給料の革命をしました。

その当時は何石という表現で、一番高い人は二千石、少ない人は二十石位です。今の金額に合わせれば、きちんと換算せず分かりやすく表現しますと、高い報酬の人が 2 千万が一番低い人が仮に 20 万とした場合、ほとんど 100 万に近づけてしまいました。

二千石の人は五百石。千三百、千四百石の人は四百石に落としたという事で、どんどん

百石に近づけた。少ない給料の人も、二十石の人は三十石と百石に近づけた。少ない人は2倍以上に跳ね上がるから喜び、削られる人は恨み辛みを言う。給料の改正で、河井継之助は中間ぐらいでしたが、自分を変えなかった。でも上も下も百石に近づけるといのは大変な事で、給料をみな横並びにしてみました。そして軍事力を強化しましたが、継之助はみな給料が同じなのだから、同じ仕事をしなさいという事で、国民皆兵制を敷いた。14歳から65歳の男は、偉くても年寄りでも学者も若いのも全員ひっくるめて鉄砲を持たせて兵隊にしました。今の日本で同じ事をしようとしたら大変な事になるでしょう。

行財政改革

長岡藩の一年間で使うお金は五万両。その時にあった借金は二十三万両。今の日本と比較してみると、今日の新聞で概算要求が100兆円と出ていましたけれども、現在の日本の借金は1千兆円で、日本の税収はいくらでしょうか？

大まかにいって政府の言っている事は、35兆円ぐらいの収入で100兆円使いたい。…官僚の頭の中は、どうなっているのかと言う事です。

河井継之助のいた長岡藩は、ちょっと金額は違いますが、すでに破綻状態。そして収入は今の日本よりもっと少ないです。

日本にIMFが入ってきた時、日本救済策を取るかという質問が国会でなされて、当時の大蔵大臣・今の財政大臣が答えているというのが国会の答弁の中にあります。それをそのまま実行するなら、かなり日本の財政は良くなると思うのだけれども、何も出来ない状態で来ている訳です。

河井継之助の視点で見ると、まず財政の面では役人の給料を減らし、借金は棒引き。

東電が役員の報酬を減らしましたが、したのも束の間で、すぐ復活したと云うのが、昨日今日のニュースで流れていました。そんな簡単に復活するものかと思うのですが、河井継之助からみれば役人の給料は少なくとも3分2ぐらいは削りなさい。それから先々の利益を考えて、政府に金を貸していた人達の借金の証文・国債は棒引き。支払いも半分ぐらい削り、公共事業はストップという類のものをドンドン打ち出していった。ただ、産業振興策は取っていましたから、公共事業も世の中の為になる仕事は、お金をつぎ込んでやっていました。

特権廃止

河井継之助はドンドン手を打っていき、変わったところでは水腐地の年貢免除の廃止。水腐地とは洪水がおきた時、水をかぶった土地は5年間年貢を免除する。税金免除を長岡藩はしていました。その免除の期間が終わっても、その特権は賄賂を使ってずっと続けていました。ですから、賄賂を使って続けていたものは廃止。今の時代で考えれば、特権、しがらみ、私企業に免除をはからっていると云うのを取っ払う。税金を復活させたと考えれば良いでしょう。そういう事が普通できるかと言えば、なかなか出来るものではありません。

せん。それから川を渡るための通行税、船を牽引する税、入浴税などの特権廃止です。今でいけば大企業、中堅、中小企業で、特権を認めていたものをドンドン排除していったと考えて下さい。

遊郭廃止

変わったところでは、遊郭の廃止をしました。河井継之助は遊ぶのが大好きで、親をだまくらかしては遊郭に行っていました。「英雄のはらわたをとろかす様な遊女に出会えれば男として本望である。英雄であればあるほど、女性の色香に迷うものだ」という科白を残して遊んでいたそうです。江戸での遊学時に、継之助の同門人に「何を見ているのか」と問われて、継之助は遊女の品評をしている紙を見せたそうです。それだけ遊びに入れ込んだ人間が、「遊郭は女性を不幸にする仕組みだから遊郭を廃止にする」と言って廃止をしました。当時の資料をみますと、遊郭の関係者が奉行所に呼ばれて、関係者はあれほど遊郭が大好きな人が奉行になったので、さぞかし御褒美を戴けるかと思って喜んで行ったら廃止と言われてびっくりし、その時の落書きで「かわいい、かわいい（河井）今朝まで思い、今は愛想がつきのすけ（継之助）」という句が巷に溢れたそうです。

遊郭の廃止と同時にお妾さんの制度も廃止をしました。徹底しています。色々な資料を読みこんでみますと、これはフィクションのようですが自分にもお妾さんがいたのですが涙ながらに縁を切って、他の人達に「自分も縁を切ったのだから、貴方達もやりなさい」とお妾さんを持っている人達を呼んでは、縁を切らせたそうです。そこで先ほどの河井継之助の血筋が上州桐生に残っているという所に繋がります。

治安対策－寄せ場－

軽犯罪を犯している人には、「寄せ場」という施設を作り、そこに軽犯罪者を放り込み、色々な事、町の為になる様な事をさせました。ちょっと変わった規則で、その寄せ場は夜10時から明け方の4時までは家に帰って良いとあり、帰って来ない人間は打ち首にすると言って外に出しました。実際に始めたところ、たかを括った囚人が「情け深いお奉行様だから、帰らなくてもお触れ通り首を切ることはない」と思い帰らず肥溜めに隠れていた所を役人が探し出して、布告した通り打ち首となりました。それから囚人たちは家に帰っても、きちんと寄せ場に帰るようになったそうです。

遊郭の廃止、行政改革、藩内の産業を振興しましたから、お百姓さんも町民もお金が回るようになってきました。それからお武家さん達も、沢山貰っている人は減らされましたけれど、概ねお金をもらう人が増えたから、やはり金回りは良くなってきました。その結果、世の中にお金が回る様になったので、税金を納める人が増えました。

<軍事面での河井継之助は、現代に役立つ>

河井継之助の時代は、外国から攻められるという状況下にありました。黒船が来て、長州は大砲を撃ちかけるが惨敗という時期でした。

長岡藩が打ち出した方針は、武装をして独立をする。それは中立国を目指すという事でした。国民皆兵制を取り、行財政改革をして給料をみな横並びにしました。なおかつ外国から大砲や銃を買い込みました。今までは刀と槍の社会だったが、これからは大砲・軍艦の世界になると宣言し、自分で横浜に出掛けて日本に来ている最新式の機関砲であるガトリング砲を購入しています。これは、機関砲という名前ですが機関銃の原型のようなもので、1分間に180発掃射する代物です。実際に戊辰戦争の時に使いました。あとは、各家に最新式のミニエル銃を配備しました。兵隊は鉄砲で装備をするようにし、軍隊を強烈なものに切り替えました。

当時は長州の奇兵隊が有名です。山田方谷が作った里正隊をモデルにし、長州が奇兵隊を作りました。その奇兵隊を戊辰戦争の時、継之助が作った隊が完膚なきまでに叩きのめし、完敗をさせたという事例が残っています。

その当時の日本でフランス式の軍隊を長岡藩が作ったというものをベースにして現代を見ると、今の日本は、中国、ロシア、韓国、台湾などの外国から攻められています。継之助がいたら、たぶん軍事力を背景にして外交を展開していたであろうと思います。今は外交を展開しておらず、黙ってうずくまって下を向いているだけで、穏便に穏便にとやっているだけで、その内領土は取られかねないと思います。外交、軍事力は、まるっきり駄目なのが今の日本ですね。

同郷の山本五十六が、「私は、河井継之助先生の精神を我がものとして戦に出る」と宣言をして似たような動きをしたというのがあります。この精神は延々と繋がっています。ただ、今の日本の中で、また自衛隊の人々は、どこまでそのDNAを受け継いでいるのかなと感じます。

いよいよ政治家は、河井継之助、山田方谷、そこら辺の動きを少しは調べて現実に活かそうとしなければ、日本というのはお先真っ暗のまま消滅をしてゆくだろうという姿が見えるような気がします。もっとも大きい時代の流れでみますと、日本が駄目になり落ちる所まで落ちたら、今度は跳ね上がる段階に入るから、消えてしまったDNAは復活し再生する。その再生の中で、決済機能としてのお金の役目は終わるでしょう。次の決済機能はどのようなものがでてくるか。私は資本主義、社会主義、共産主義が終わって、知足主義が始まる。そのベースは温かいお金、決済機能が変わるという事を言っていますが、中斎塾顧問が勧める本にも少し触れています。

<時代の洞察力>

今の日本が行財政改革、富国強兵をしていく時には、憲法改正が必要でしょうし、政治の仕組みを変えるのも必要でしょう。継之助の頃は、命を捨てる覚悟で全て行っている。

その様な観点で現代を見る必要がある。また河井継之助が大変優れていたのは、時代の洞察力です。これからどういう時代になるかという事を色々と周囲に言い残しています。ちょっと面白い言葉を幾つか御紹介します。

「天下になくてならない人となるか、あつてならぬ人となるか。沈香もたけ、へもこけ」
「人というのは棺桶に入れられて、上から蓋をされて土の中に埋められてでないとならぬ」というのが若い人間に対して言った言葉です。

本間ムツという旅館の女将に「見ている、男の髪はみなザンギリになる。ちょんまげが無くなってザンバラ髪になる」という事を若女将に、これからの世の中はそうなると言ったそうです。武士同士の中で、「あと 10 年経ったら武士はいなくなる。皆町人、商人になる」と大政奉還する 7 年前に言っています。西郷隆盛や坂本竜馬が活躍する前に、武士の社会はなくなると言いきっています。時代の洞察力は凄まじいものがあったと思います。

自分が死ぬ寸前に、従っていた若者に「おまえは侍になりたいと言っていたから、侍になるようにと考えたけれども、もう私はこれから死ぬ。お前の将来をみると武士になるよりは、商人の才覚があるから商人になりなさい。これからの世の中は商人の世の中になるからお前はそうなりなさい」と遺言をして亡くなりました。ちなみに遺言をされた外山修造は、後に大阪の国立銀行の頭取になり関西の会社設立に尽力し、大阪の大立者になっています。

時代を見抜き、周りの人にアドバイスをかなり残しています。具体的な話も残っていますので、そこら辺が役に立つ話だと思います。

画家の小山正太郎が書き残したもので、「亡くなる寸前に河井継之助は見るからに苦しくて飛び上るほどの苦しみのまっただの中にも関わらず、一言も苦しい、辛いとは言わなかった。悲鳴は上げないで、眠るが如く死んでいった。周りの人間と談笑して平生と変らぬ態度、普通の語調、声音で話して、それで死についた」とあります。

本人は、戸板で運ばれて痛い苦しい辛いとは言わないけれども、銃創に貫かれて足が腫れ上がり体中に壞疽が回り、体中桜色に染まりながら句を詠んでいます。激痛に耐えて痛みというのがこんなに自分を苦しめるというものを始めて知った等々、そのような事を客観的に話しています。

現代の政治家の人々に、河井継之助の凄かった時代洞察力を活かして貰おうと思うと、どうしても文明論に入ります。

文明論が自分のものになっている人はいるのか。言葉を大切にして、時代の洞察をして、これからどういう流れ、世界各国がどういう風になるか。世界各国の流れを見て、日本の動きを見て、それで自分自身の関係するところはどうなっているのかを描くという形でなければなと思っています。

その視点から見ると、河井継之助を研究し発表するには良い時世にきた。かなり革命的な事をして成功をしている人物ですから、よくよく研究するのは良いでしょう。

自分自身で、学んでいることの力、学ぶということの意味、私はどこかで学んでいるという事をどこかで実感する。そういうチャンスを皆様も自分でつかんで戴いて、学んでいるものは、これだと云うものに巡りあってくれると良いなと思います。私は本 2 冊書くことによって、その巡りあいを果たそうと思っています。